

第 27 回欧州臨床微生物感染症学会 (27th ECCMID) に 参加して

中村 彰 宏*

はじめに

2017 年 4 月 22 日から 25 日の 4 日間にわたり、オーストリアのウィーンにて第 27 回欧州臨床微生物感染症学会 (ECCMID) が開催されました。本学会は、臨床検査技師から医師まで多職種にわたる研究者が毎年 1 万人以上集う国際学会で、米国微生物学会 (ASM) とならんで感染症業界では世界トップレベルの学会です。今回、私は本学会において一般演題口演発表がアクセプトされ、初めて英語でのプレゼンテーションをする機会を経験しました。本稿は本学会をとおしての自身の体験、学会内容およびその印象について報告します。

I. 演題アクセプトまでの道のり

私は以前より多剤耐性腸内細菌科細菌における世界的蔓延の原因追及をテーマに研究してきました。本学会にエントリーした演題名は「Proteomics analysis and detection of the specific biomarker proteins of multiple drug-resistant *Escherichia coli* ST131 clonal group by MALDI-TOF MS」です。ST131 クロンは多剤耐性大腸菌における世界的パンデミッククロンであり、他のクロンに比べて高耐性かつ高病原性の特性をもつクロンです。私はその ST131 クロンに特有なバイオマーカープロテインを探索し、その一部をタンパク

質同定することに成功しました。

本学会の演題募集締切は 2016 年 11 月末で、私はその約 1 ヶ月前より抄録執筆にとりかかりました。本学会は自身にとって過去 2 回目の国際学会エントリーでしたので、抄録作成は、初めての時よりスムーズにできましたが、細かい英文法や英単語等の最終チェックはネイティブスピーカーによる英文校正を依頼しました。そして、リジェクトされることも覚悟のうえで一般演題口演発表としてエントリーしましたところ、見事アクセプトされ、晴れて国際学会で口演発表の機会を得ることができました。

II. 学会発表までの準備

勇気を振り絞って口演発表エントリーしたものの、アクセプトされてから以降のプレッシャーはとてつもないものでした。私は人生初の英語でのプレゼンテーションを目の前にして何から始めればよいのか、非常に悩みました。特にプレゼンテーション後のディスカッション時に必須となるリスニング能力を訓練する必要があると感じ、学会開催までの 3 ヶ月間、ひたすらリスニングの猛特訓をしました。勉強材料は TOEFL テストのリスニング対策本 (大戦略シリーズ) およびラジオ英語番組 (NHK 入門ビジネス英語および実践ビジネス英語) でした。この 3 ヶ月間は今までの英語の勉

*天理医療大学医療学部臨床検査学科 a.nakamura@tenriyorozu-u.ac.jp

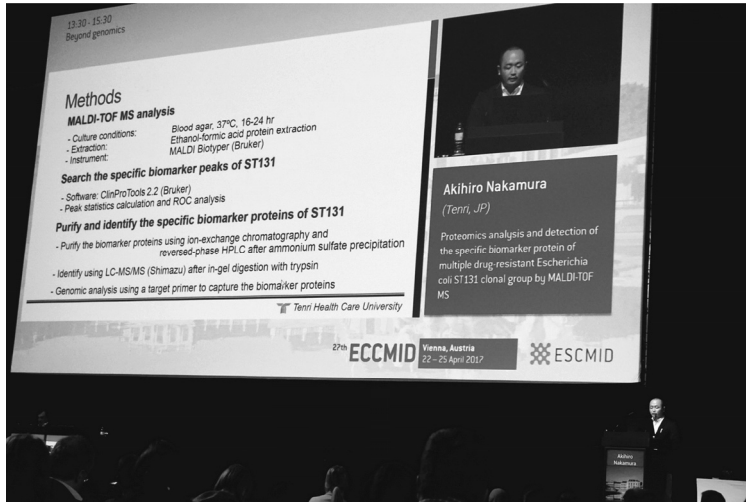


写真1 一般演題口演セッションにて発表

タイトルは「Proteomics analysis and detection of the specific biomarker proteins of multiple drug-resistant *Escherichia coli* ST131 clonal group by MALDI-TOF MS」。スクリーンは自身の顔がリアルタイムに映し出される最新プレゼンテーション環境下で行われました。

強期間のなかで一番得るものが多く、勇気を振り絞って口演発表にエントリーし、自身を追い込んだ甲斐があったと感じています。

III. 学会発表

私の発表は学会初日で、「Beyond Genomics(ゲノミクス解析、その先へ)」というセッションでした。本セッションは次世代シーケンサーを用いたメタゲノム解析やタイピング解析など最新技術を駆使した研究データが発表されており、非常に活発な質疑応答が繰り返されていました。国際学会は国内学会とは異なり、まだプレゼンテーションが終わっていない段階からマイクの前行列ができるほど、多くの質問が繰り返されます。質問されない演題は皆無でした。前述した猛特訓のおかげでプレゼンテーションは原稿を見ることなく、無事終えることができましたが、やはり問題は質疑応答でした。付け焼き刃のリスニングおよびスピーキング能力ではまだ完全に対応できないことを痛感し、今後の英語の勉強意欲を高める上で、大変良い経験を積ませていただきました。また、非常に大きい会場、そして最新のプレゼンテーション環境で発表できたことも良い経験とな

りました(写真1)。

IV. その他学会の概要

本学会は126カ国から12,494名の参加者、100題のシンポジウム、20題の教育ワークショップおよび5,223題の一般演題が得られ、盛況に開催されました。私は自身の研究領域である細菌プラスミドに関する研究や質量分析および次世代シーケンサーを用いた研究を中心にシンポジウム、教育ワークショップを拝聴しました。近年、次世代シーケンサーの開発により、細菌の全ゲノム配列は解読されたものの、そのゲノムから産生されるタンパク質の機能は未だ半分以上が明らかになっておらず、今後はゲノミクス解析だけでなくプロテオミクス解析が重要であることを再認識しました。最先端の情報収集により有意義な学会参加となり、今後の研究に大いに活用したいと思っています。

本学会のポスターセッションはe-Posterシステムを導入しており、タッチパネル式モニターで全て閲覧やワード検索も可能であり、大変便利なシステムでした(写真2)。

また、機器展示会場も大規模で素晴らしく、端



写真2 タッチパネル式モニターによる e-Poster システム (写真は天理医療大学 小松方先生)
本学会にエントリーされた 5,000 題を超えるポスター演題をモニター上で全て閲覧可能

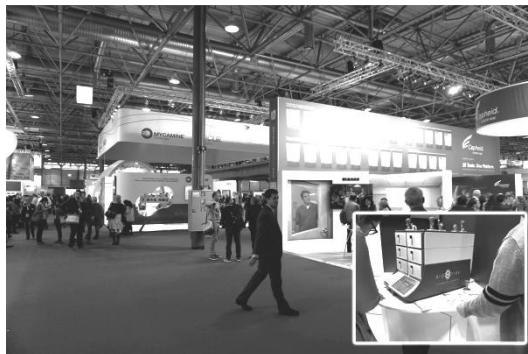


写真3 企業展示会場
企業展示会場と BioFire 社の Film Array System



写真4 ザルツブルグ観光にてアルプス山脈を背景に記念撮影
(左：天理医療大学 小松方先生、右：福島県立医科大学 豊川真弘先生)

から端まで回るのに丸1日かかるほどでした。私が特に興味を持ったのは BioFire 社の Film Array System で、呼吸器材料や髄液材料から 20 菌種以上の網羅的迅速遺伝子解析をする機器であり、将来臨床現場で使用されることが大いに期待されるものだと感じました(写真3)。

V. オーストリア観光

～ウィーン、そしてザルツブルグへ～

同行させていただいた先生方と学会の合間をぬ

って、ウィーンおよびザルツブルグを観光しました(写真4)。ウィーンは音楽の都であり、自身は幼い頃からヴァイオリンを習っていたため、大変充実した観光となりました。また、ウィーンから電車で約3時間かけてザルツブルグへ向かい、モーツァルト生家やベートーヴェン最後の家も観光しました。諸先生方と大変充実した時間を過ごさせていただき、今後の研究への大きなパワーをもらいました。余談ですが、海外旅行はスマートフォンの Google Map が大変役立ちます。空港にて

出国前に期間限定貸出用ポケット wi-fi を契約し (5 泊契約料約 5,000 円前後)、その 1 台に同行メンバー全員のスマートフォンを数台接続しながらの観光をお薦めします。

おわりに

私は本学会に参加することで英語力の重要性を

再認識しました。次回の国際学会の時までにさらに英語能力の向上に努め、日本から世界への情報発信を目指して、是非再度挑戦したいと考えております。また、本稿を読んでもくださった国内若手研究者の方々から国際学会で発表する人が増えることを期待しております。